

フロイトの症例「ドラ」から学ぶ

北山, 修
九州大学大学院人間環境学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/825>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 1, pp.1-9, 2000-03-10. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

フロイトの症例「ドラ」から学ぶ

北 山 修

LEARNING FROM FREUD'S CASE "DORA"

OSAMU KITAYAMA, B. M.

In recent times the Dora case, the first of Freud's great analytic cases which used to be a model for psychoanalytic students, has received critical attention from psychoanalytic scholars such as P. Mahony whose detailed and brilliant works have really inspired the author to write this article. The author at first summarizes the case history, and several critical points, which vigilant critics have made in regard to Freud's understandings and treatments of the case, including the significant omission of Dora's mother from the case description and the absence of Freud's awareness of the conspiratorial alliance with the father and Mr. K. In the rest, the author argues that the linguistic understanding and usage of the ambiguities and metaphorical structures of her wordings, in spite of the critical points, should be what we can learn most from the case report to grasp psychopathology of neurotic cases including hysterics and psychosomatics.

Key Words: psychoanalysis, Freud, Dora, ambiguity, metaphor

フロイトの報告したドラ症例は、彼の本格的症例報告としては最初のもので、精神分析を学ぶ者たちにとっては教科書的存在であった。しかし、最近では精神分析研究者からの批判の対象になっており、とくに P. Mahony の詳細で質の高い研究は、この小論の著者である私にこれを書かせることになった。その前半では、病歴を要約し、本症例のフロイトの理解と取り扱いでこれまで注意深く批判されている諸点を紹介しているが、そこには母親についての無視の意味や、父親や K 氏との共謀的な同盟関係についてフロイト自身が気づいていないことなどが含まれている。後半では、患者の言い回しの曖昧さや比喩的構造について、治療者が言語学的に理解し活用することが、その批判点にもかかわらず、本症例からもっとも学ぶべきところのひとつであり、それはヒステリーや心身症を患う神経症患者の精神医学病理を把握するために役立つものであることを論じている。

本論文は日本精神分析インスティテュート福岡支部主催における講義「フロイトの症例」(平成 11 年 7 月 17 日)に基づいて構成され執筆されている。

I. はじめに

症例ドラ(Dora)として S. Freud が報告した患者は、報告では 18 歳の女性であるとされてい

る。しかしながら、すでに P. Mahony が Freud が患者の年齢を高めに見積もっていた可能性を示唆しており、もし彼の推理に従って、本症例における第一の外傷体験の 때가 ドラ 13 歳で、第二

の外傷体験が15歳だったとしたら、読者は少し印象の違う「少女」の報告として読めるかもしれない。またその年齢のことが、当時の初潮年齢の平均がかなり高い(16歳半という情報がある)と推測されるだけに、本症例の取り扱いに深く関わることであり、こうして最初に言うておくのがよいだろう。私たちは、日常的にどこで子供と大人の線引きをしたらよいのかについて困難を感じており、その曖昧領域でわれわれの治療関係に微妙に個人差が生じるのである。

私が症例ドラに興味を持ったのは、もちろんそれがヒステリー研究の古典だからという正当な理由があるからだが、最初これを読んだとき、その性シンボリズム中心の焦点づけと解釈に何か釈然としないものが残ったことを覚えている。30年も前は、私の周りにいた多くの読者が、率直に本当のことを言っているのだと自ら主張する Freud を高く評価していたのに対し、私は何かついてゆけないものを感じたものである。

それが、本格的な研究対象として知的な関心が深まったのは、来日した Mahony 教授のおかげである。また、彼の著作『フロイトの書き方』(1996)を翻訳刊行した時にも、すでにその最終章で人々のドラ報告の読み方に彼の深い関心が向けられていることは知っていた。彼は来日に際してもこれをとりあげ、“ああ！可哀想なドラ、みんな彼女の病気を知っていたのに(Ala Poor Dora, They Knew Her III)”という題で各地で講演を行ったのである。翻訳者の一人としてそれにおつきあいした私は、臨床家であると同時に研究者である彼の問題意識と取り組みの周到さに感銘を受けた。その講演の内容は小此木啓吾(1997)ら日本の研究者のコメントと共に精神分析研究誌(Mahony 1997)に掲載されており、彼の研究そのものは“Freud's Dora”(1996)として一冊の本として刊行されているので、関心を共有する読者には、これらのどれかを、私がこれから書くことの参考にしてもらいたい。

しかし、Freud のやることは全て正しいとされた時代から出発して、後継者たちが自らの見聞や臨床体験を経て考えを改め、批判を加えて

読みを修正していく経過を体験できたことは、旧世代の幸せだが、今からこれを初めて読む者たちは、多数の批判の中で本症例から一体何を学ばいいのだろうか。批判される事柄を含めれば学ぶべきことはそれはもう限りなくあるだろうが、次世代のことを強く意識しながら、本稿では、なされた批判をできる限り要約してみたいと思う。そして、この私の関心が言葉にあるので、その線にそって性シンボリズムについての新たな読み方、学び方も示したいと思う。

それで、まず報告された治療経過を要約しておこう。引用する素材はもちろん、五つの詳細な症例研究のうちの第一作「あるヒステリー分析の断片(Bruchstück einer Hysterie-Analyse)」(Freud 1969:Freud 著作集V)であり、内容はJ. Strachey の年表によれば1900年の10月から12月までの治療の報告であり、論文は1901年1月に執筆され、1905年に発表されたものである。

II. 治療報告

この18歳女性の病歴と家族歴の要約は、簡単に言うなら次のごとくであるが、その大部分は治療とともに語られ注目されたものである。詳しくは、原典を見てもらいたい。

[病歴]

8歳で発作性呼吸困難出現、しばらく続く。12歳で偏頭痛と神経性の咳が始まるが、16歳で偏頭痛は全快するも神経性の咳は持続する。当時一度、精神療法を提案される。その後失声、父と言い争った後の失神発作、不機嫌、倦怠、交際嫌い、自殺願望が示され、18歳(1900年)でFreudの治療を受けることになる。

[家族歴]

父親は40代後半の名声と才能ある大工場経営者である。ドラはなついでおり、父もドラの才能を誇りとしていた。結核が理由で気候の良いBへ移住したが(1888年、ドラ7歳頃)、結核は急速に回復する。網膜剥離で視力障害があり、梅毒による麻痺と精神症状があつて、1894年にはK氏に伴われてFreudを受診し抗梅毒薬を処方されている。ドラは病弱な父を熱心に看病するが、やがて代わりにK夫人が看護するように

なる。

母親は無教養で愚かと言われ、潔癖症。母娘関係は悪く、母を見下していたが、母の「影響から完全に脱し去っていた」と言われる。

兄は、一歳半年上だが、疎遠。後に政治家として成功する。

[生活史]

活発な子で、4・5歳まで指しゃぶりがある。また、7歳で夜尿症があった。思春期になると、保養地BでのK家との交際の中で(ドラは12歳前後)、K婦人と親しくなったドラは、K氏の子供たちに母親のように世話をやいた。しかし父とK夫人との性的関係の成立により、両者のこれまでの彼女に対する愛情をともに失うことになる。

K氏の性的接近(1898年14歳時のK氏の突然の接吻と1898年16歳時湖畔におけるK氏の求愛)などを父に語るが、空想として取り扱われる。ドラはK氏一家との交際を断つよう求めるが、K夫人との情事を続ける父から断られて、ヒステリー症状が増悪する。

[解釈]

さて、以上のような経過に対するFreudの解釈は、抑圧と置き換えの観点を理解の基本に据えて、性的シンボリズムを中心に進められる。まず、K氏の接近が彼女に性的興奮を呼び起こしたが、これは抑圧されて、吐き気や男性恐怖となる。夜尿は自慰に由来し、呼吸困難は父の性行為の際の呼吸促進の模倣とされる。神経性の咳については、重複した原因が挙げられ、それは器質的な咳刺激もあり、幼児期の指しゃぶりの激しさに表わされたように口唇領域が性感帯となっていて、すでに身体的な準備があったが、さらに結核の父の模倣、自己の性器カタルにまつわる自責、K氏への愛情、インポテントの父とK夫人とのフェラチオ場面の想像(この解釈で咳が消失)、K氏夫人との同一化などである。

それまでもFreudが度々行う解釈の具体例を挙げると、総じて下半身の問題が上半身に移動していると理解され、次のように解釈される。「彼女は、嵐のような抱擁のなかで、唇の上に重

ねられた接吻ばかりでなく、身体に対して勃起した性器の圧迫を感じたのだ、と私は考える。この衝撃的な知覚は、回想から除外され抑制されて、胸郭上の無害な圧迫感に置き換えられてしまったが、それは抑制された源から、異常な強さをえていたのだ。すなわちこれもまた、下半身から上半身への移動である。」(293頁)

[夢分析と中断]

実は、この報告は本来、『夢判断』(1900年11月に出版され、そのときドラの分析中だった)の著者Freudによって夢分析を中心に構想されていた。それゆえ、二つの夢の分析には、夢分析において性シンボリズムを取り扱うFreudの典型的な手法が見られる。言語面から見たその具体的な手続きはあとから追加するとして、第一の夢は、男性からの性的誘惑の危機を防御するために父への幼い愛着が復活したものであり、第二の夢はK氏、父、Freudに対する復讐空想が織り成すものという理解が示される。

これだけ詳細な理解がなされながら、ドラの申出により分析治療は3カ月で中断となる。分析家は転移の兆候を明確に把握できず、これに対処することができなかつた、と次のように反省する。「私が彼女にK氏を思い起こさせることになったある未知の事情(X)のために彼女がK氏に復讐しようとしたのと同じように私に復讐し、K氏にあざむかれ捨てられたと思ったのと同じように私を捨てたのである。」(364頁)

つまり、ドラはまず父親転移を起こし、ついで治療中、K氏とFreudとを同一視してK氏に対する両価的な感情をFreudに向けたのである。また、「魅惑的な白い体」のK氏夫人に対する同性愛的な感情(男性拒否を伴う)を取り上げて患者に伝えられなかつたことも失敗の原因のひとつとされる。

Ⅲ. その後のドラ：Freudへの批判

Freud自身の反省にもかかわらず、以上の治療報告に示された病理学と技法の内容の多くが、そのままその後の精神分析におけるヒステリー治療とFreud的態度の教科書のようになった。とくに、自信たっぷりのFreudが格言をもつ

で示そうとする、「余は猫を猫と呼ぶ」「オムレットを作るには卵を割らねばならない」という、患者の抵抗に抗して症状の背後に隠された性的な意味を率直な言葉で明らかにすることこそが精神分析に固有のものだという理念が、この実例とともに具体的に示されたわけである。率直な言葉による性の領域への接近とは、婦人科医の態度に譬えられ、通俗的な遠慮を排除し、治療という大義のためになすべきことをなし、言うべきことは言うというものである。

ところが、治療が終わって100年を経た今、この治療には次のような批判が寄せられている。それらの一部は、日本の研究者たちによっても指摘されてきたことであり、現代ではこれらの欠陥を見抜くことはそれほど困難ではない。たとえば精神分析学会ではシンポジウムが開催され、精神分析研究誌には下坂幸三(1970)を含む症例ドラマに関する特集があるが、その確かな洞察と批判精神の高さは目を見張るものがある。ここでそれらを要約しておこう。

- ①まず Freud の方針が、患者とともに心の世界をながめていくというような、探索的なものではない。彼の関心が外傷論から内的幻想論へと移る途上にあって、同時に世に問うたばかり夢理論や、エディプス・コンプレックスと性シンボリズムの証明という知的な目標がすでに設定されてしまっている。つまり、自説の証明という分析家の欲望が、治療を仮説例証的な性急さで満たしてしまっていて、実際は個別の事情にそった探索的で仮説発見的な態度が求められるところなのである。Freud は、患者の K 氏への愛情を父親への愛情の置き換えだと理解し、それが自分にも向かっていると感じており、その線で一貫しているが、今から見ると、下坂がすでに指摘している通り、母親的なものを彼女が求めているという理解が、過去を重視する Freud の視野にないことは、明らかに不自然である。
- ②その仮説の押し付けとともに、もう一つ押し付けが加わって「二重の押し付け」と呼ばれるものを作ってしまったところがある。それは「男盛り」の Freud 43 歳による、「男

根的」な侵入的態度であり、それは K 氏の求愛に似て、早すぎる性解釈を生み出し、その調子は興奮に満ちている。実は読者も、この赤い布をひらひらさせて舞う闘牛士に向け突進する闘牛のような介入に、闘牛場の興奮を味わうことになり、最後には、女性闘牛士はそれをかわして去って行く。ヒステリー患者の治療を闘牛に譬える G.Kohon(1992)は、Freud が「有頂天になっている」と形容しており、「お互いに誘惑している……彼の解釈の多くが、そして解釈の行われ方が、父親の近親相姦的誘惑の試みとしてしかドラには理解されなかったのである」と見ている。しかし、このような登場人物を得たことが、この治療報告を劇的な展開をもつ一級の「読み物」としても読者の関心を引き続けさせるのである。

- ③この少女は、家庭教師にも同様の求愛を行ったという、性的に積極的な K 氏によって侮辱されたのであり、またドラの主張を認めない父親により、自尊心をひどく傷つけられている可能性がある。ところが、Freud はそれに共感的ではなく、好きな男性に言い寄られて求愛を受けないのが「わからない」と言う。Mahony(1997)は、この著者が「かわいそう」という言葉を他の登場人物には使うのに対して、ドラに対しては使用しないことや、ドラ(本名 Ida Bauer)という偽名がお手伝いの名であることに注目している。
- ④彼女は、自分でも訴えていることであるが、大人たちの「いけにえ」「交換条件」にされているのである。父親と K 氏夫人が性的な関係にあるため、もし K 氏にドラが提供されて関係ができるなら、両家はお互いに女性を交換したことで一見丸く納まることになる。Freud は、そういう彼女について次のように描写する。「彼女はみじめな気持ちのときには、ドラの父と K 夫人との関係を K 氏が我慢している代償として、自分が K に引きわたされているのだ、という思いから逃れられなかった。」(297 頁)

Freudは、父親やK氏とはすでに顔見知りであり、この環境側の「陰謀」にのせられ、ときに積極的にのっているように見えるが、すでにR.Lang(1980)が「偽りの同盟」という概念でこの問題を取り上げている。患者はこの大人たちの陰謀と環境の病理に異議申し立てを行っているのであり、Freudが心的真実に注目するのに対して、ドラは歴史的真相を認めよと主張しているのである(E.Erikson)。また、関係家族の他にも、ドラの行動を扇動した大人として家庭教師がいる。

- ⑤もちろんFreudは、ドラの病理を青年期固有の問題として考えていない。今ではJ.Glenn(1980)たちが強調するように、急激に高まる性への意識や性の嫌悪感、さらに同性愛傾向、大人へのアンビヴァレンツと対決姿勢、純粋なものを追及する傾向などが思春期や青年期の特徴であることが知られている。しかし、P.Mahonyは、Freudの手紙を引用し、一方では同世代の娘Annaの青年期的な「無邪気さ」を認めているFreudの矛盾を「グロテスク」だとも評しており、はっきり言ってFreudはドラが嫌いだったのではないかとさえ示唆するのである。

[その後のドラ]

実は、Freudの治療後20年以上経過して、ドラは分析家Felix Deutschに相談するように主治医に言われている。その後の報告では、多彩な身体症状と急激な治癒が報告され、「もっとも不愉快なヒステリー患者の一人」と書いているという(Kohon 1992)。結婚して息子がいるが、周囲はドラのことで悩まされている様子であったという。これを見る限り、症状はかなり難治で、安定した治療関係がなかなか維持できない患者であり、多くの治療者が早晩の中断は覚悟せねばならない事例であると判断できる。

IV. ドラから学ぶ

(1) 対象関係論的な読み方

それでは、この症例報告はどのように理解すべきかという、私は第一に、性欲の抑圧モデ

ルよりも対象関係論的に読まれた方がいいと思う。Freudは一貫して、父親 — K氏 — 分析家への性的愛情欲求と復讐の線で解釈しているが、それは愛情欲求だけではなく相当にアンビヴァレントである。そして誰もが気づくように、母親を求める彼女の依存欲求や、その前に立ち現れる男たちが母親的でないことに対する同性愛的な怒りや失望を発見することは難しくない。裏切りは、男性とだけでなく、ドラの思慕の対象でありながらその父と関係をもったK夫人という重要人物との関係においても起こったことである。男性であれ女性であれ、その性別に関係なく、いわゆる理想化に満ちた良い関係と失望の多い悪い関係のスプリッティング(対象関係の分割)は顕著であり、それはまた侵入的なFreudとの治療関係の中断の危機においても現れていると言えよう。

また、この患者の言動がFreudが理解するほど極端に性的なシボリズムに満ちていたのなら、それはむしろ性愛化の病理として重症であることを示唆しており、精神療法を行うためには困難な治療関係を予測させるサインであったと考えられる。それは境界例と呼ばれる依存的な患者に少なくない頻度で見られる局面であり、治療者が高まる逆転移を抱えて対応していかなばならない事例であろう。また、症状の詳細に関心を抱いて、その個人の心的で内的な意味を深く追求するのではなく、むしろ外から始めるべきという方針の下で、もっと外部の病的とも言える環境と訴えとの密接な関係に注目し理解し介入すべきであるという意見もあろう。

それは、内的世界の「蓋をとる方法」ではなく、対象関係の統合と、内と外の間(あいだ)を調整して新たな関係を創造するという、内外の関係性と中間領域に注目する方針であるといってもよいだろう。その線にそって、対象関係や環境との関係に注目し、報告された夢を解釈し直すことを試みることができよう。つまりは第一の夢は危険な家を出るということが主題であり、下坂(1970)は夢の中でドラの執着する宝石箱とは、自己愛的な母親象徴であり、ドラが何を求めているのか示唆的であると考えている。

また、第二の夢はドラの家族関係における絶望や深刻な喪失体験がよく表されていると解釈できる。そしてこういう理解が、被害者としてのドラに共感的な態度を生み出すに違いない。

(2) 臨床言語論としての症例ドラ

ヒステリー理解とともに誕生した精神分析は、同時に精神分析的な言語論をも生み出したのである。それは具体的に言うと、ヒステリー症状を抑圧された無意識的なものの置き換えと理解し、分析家はその無意識の内容を「猫を猫と呼ぶ」がごとく言葉で解釈していくという治療実践を伴うことになる。それは象徴解釈として知られるものであり、その言語論は『ヒステリー研究』の事例カタリーナの項で次のように言われる。

「われわれはしばしばヒステリーの症状論を象形文字と比較してきた。象形文字は、二つの言語を記した例のいくつかが発見されれば判読することができるのである。この[カタリーナの]場合のアルファベットでは嘔吐が嫌悪を意味している。」

二つの言語とは、独語“Ekel”が日本語と同様に吐き気(吐きそう)と嫌悪感(吐きそう)を両義的に意味するように、この場合身体的な言語と心理的な言語である。それは、この身体症状という表面的で意識された意味の背後にある、無意識的な言語が置き換えられたもので、この両方の関係を読み取って取り扱うために、これを両義的に表現する症状や、二重の意味を合わせ持つ言葉を発見することが臨床的に便利である。その根拠は両義性に満ちた表現は、ドラの場合、意識されたものと抑圧されたものを同時に開示するレールのポイントに譬えられる。

「二義的な語は連想内容に対する“転轍機(ポイント)”のごときのものである。このポイントが夢の内容のなかであわされた方向とは違った方向に調整されると、いまだに夢の背後に隠され、探し求められていた思考がその上を動いていく軌道に達する。」(320頁の注)

こうして両義的な表現や言葉が、夢の顕在思考と潜在思考とを、また問題の意識的な意味と

無意識的な意味とを橋渡しするのであり、そういう言葉の「橋渡し機能」(北山)を発揮する言葉や表現を見つけて活用するのが精神分析の方法であり、そういう理解の背後には精神分析の以上のような、両義性の臨床言語論があると言える。

(3) 国語発想論的解釈とメタファー論

その技法は、記号/意味という記述法に従うなら、症状という記号に対応する意味を発見する作業だが、注目される記号の両義性は、“Ekel”の場合のように国語の中で共有される現象であり、けっして個性的なものではないところが重要に思える。つまりそれは、私が「国語発想論的解釈」と呼ぶものであり、患者と分析家が共有する国語で「そういうから」という事実を理解の説得力にしているのである。独語でなされたやりとりでの具体例は日本語訳では伝わらぬことが多いが、J.Stracheyの英語訳標準版(とくにS.E.=スタンダードエディションの7巻の第二の夢の解説)には、独語の分からぬ英文読者のために明快で丁寧な訳注が付せられている。独語原典を読まないわれわれは、例えばS.E.を通して以下のような言語的事実のあることを知り、Freudが患者への説得力にしている国語の枠組みというものに出会う。

ドラが箱の意味で使う“Schachtel”は女性を侮蔑的な意味で指すことがあると訳注はいうが、このように独和辞典をひけば確認できる事実も、ただ箱と訳されているのでは気が付かない。またS.E.7巻99頁(邦訳では348頁)を見れば、ドイツ語を母国語にしない読者なら、以下のような訳注なしではFreudの方法にまったく接近できないことに気がつくだろう。例えば、絵(Bild)が女性のイメージと重なるのは、「女の絵(Weibsbild)」という表現が独語では「悪女」という意味になるというからだが、日本語訳で文字通りに訳されたものを読むだけでは分からない。また“Nymphen”が「妖精」と「小陰唇」とを意味するのも独語の事実であり、駅が女性性器と結び付くというのも、駅(Bahnhof)と前庭(Vorhof)が語尾の語呂合わせでつながり、そ

の「前庭」が女性性器の一部分を指していて、また駅は交通と結び付いて、その交通が“intercourse”と同じで性的交渉を意味するなどという話もまた、日本語では分からぬが、S.E.ではよく分かるようになっている。そして、それは辞書にもものっているドイツ語圏の国語的な事実なのであり、分析家と被分析者はその水準で交流している。

こうして、交通は性交のメタファーであり、吐き気は嫌悪感のメタファー、あるいは比喩であると言え、それら比喩を使用した会話の具体例の多くは国語をこえることは難しい。しかし、同時に、言葉遊びや比喩という現象は国語をこえて存在するのだが、Freudには、その国語をこえてこの方面での解釈の構造論を展開するための言語論がなかったと言える。それは20世紀の言語学者と、それを支持する人々による構造主義的な思考の発展を待たねばならなかったのである。だから、Freudの注目する症状とその意味の関係や、言葉の両義性などを、メタファーや比喩の観点から考え、彼は「メタファーとしての症状」や「適切なメタファーの発見と使用」として自らの解釈論を整理することができなかつたのである。

しかし今の読者たちは、本論で示したようにドラの臨床理解に、言葉の両義性や言葉遊びが活用されていることに気がつくことができる。実際に、Freudは、吐き気は嫌悪感のメタファーとは言わず、ただ嫌悪感が吐き気に置き換えられたと書いているのだが、この置き換えが比喩の生まれるメカニズムの一つなのである。

だがしかし、メタファー論の不在には、言語論に深入りしなかつたFreudの側にもう一つの理由があると思う。それは、彼の文字通りの意味の重視である。症状は無意識の意味のメタファーであると言うなら、その抑圧された意味を表現する適切な言葉の発見こそが分析治療だということになるが、そういう言い方を繰り返すなら、言い換えとしての解釈は絶対ではなくなる。症状の隠された意味を明らかにするためにFreudは性の言葉を数多く用いているのだが、性交が交通で譬えられるとしても、性交の比喩

は交通でなくともよいわけであり、記号の恣意性を強調する文化では、解釈は比喩なのだから別の言葉でもよかつたという考えに出会うことで彼の性の解釈の絶対性が薄れる。

しかしながら、「猫を猫と呼ぼう」とはっきり決意するFreudに、それを名づける言葉が「猫」でなくともよかつたという発想はなく、猫は猫でなければならぬことになる。つまりそこには、精神エネルギーのエス(それ)が具体的に描き出されるときに、「子供」と呼ぶのがいいか、「野獣」と呼ぶのがいいのか、それとも「身体に根差した欲望」の用語で記述したほうがいいのか、というような言葉の選択の自由さはない。基本的に解釈の言葉とは厳密にはどれでもよくて、臨床では個別の事態に応じてより適切な言葉を発見し使用するという分析家の態度は、やはりポストモダンの波を被った精神分析のものなのである。

こういう解釈の相対化の動きを見てみると、やはりそれは解釈が外からやってくるという表音文字文化の「言葉＝名札」説の中にいると感じる。また、意味を表す言葉は文化によって違うのだから、猫は“cat”でも「猫」でもいいとしたら、意味はそれを表現する言葉を決定しないのは自明である。だがしかし、表意文字を使う私たちは、前に「文字通りの体験が比喩になる過程」(北山 1993)で示したように、言葉の文字通りの意味を忘れてはならないと思う。日本語で言うなら、「猫」が「寝た子」の連想から来ているというように、猫には「ネコ」と呼ばなければならない理由がある。そこには文字通りに寝ている子が幻想や連想として思い浮かべられているのである。つまりここでは、名前は意味と分かち難い形で内側から発生しているのである。土居健郎の「甘え」という言葉は幼児語のウマウマから発生する、という考えも、意味と言葉(音)とが分かち難い形でうまれるという考えである。そのM音が満腹などの身体的な充満と共に発生していて、だから今もマヤムにはそういう満足や充満の意味があるという豊永武盛(1999)の音韻論もまた、言葉が意味と分かち難い状態から生まれるという過程の存在を示

唆しているのである。

ゆえに、幾多の解釈の可能性の中でどのような解釈が正しいのかという問いには、やはり臨床では言葉が発生するその内的・身体的過程に耳を傾けることによって答えるしかないのだと思う。だから、ドラが語る「宝石」は、「大事なもの」「贈り物」から「性器」までのどれかを意味するというメタファー論の中の複数の意味や、その中でとくに絶対的に意味されるという「性器」などの、多数の読みと解釈の可能性については、彼女の側から発せられる声を聞いている者ならば、正解はどれなのか、一歩進んで、よりよく分かるはずなのである。

V. さいごに

さて Freud は、その解釈発生のための、彼女の内的過程に耳を傾けていたのだろうか。また、こういう問い方もできる — Freud の欲動論は、文字通りの外的真実か、内的真実(幻想)か、それともメタファーという言い回しの問題か？

つい最近まで、なかなか分析されない転移として、精神分析協会や教師たちへの理想化があり、フロイディアンの「権威的同一化」によって、Freud の言うことを真に受けていたことを Mahony は指摘し、それでドラの治療に関する批判が遅れたと言う。ところが、Freud の解釈が幾つもの可能性の中のひとつののだとして、これまでこの症例報告からは読者は Freud の言うことばかり聞いていたことを反省するとき、初めてドラの言いたいことが聞こえて来るように思う。実は、多くの場合、Freud の考えはよく分かるのだが、その声がまだ大きくて、またそれに対抗して主張するドラも声高で、ドラの内なる密やかな声が聞こえにくい。こうして、私たちが分析家として彼女と会ったならば、しばらく Freud の言ったことを忘れ、彼女の訴えを聞きながら何も解釈しないでこちらの頭のの中に何が思い浮かぶのか、ぜひとも知りたいところである。

参 考 文 献

- 吾妻ゆかり・妙木浩之 (1993) 「現代のエスプリ 317・フロイトの症例」, 至文堂.
- Freud, S. (1978) Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria. In: *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Hogarth, Vol. 7.
- フロイト, S. (1969) 「あるヒステリー分析の断片 (Bruchstück einer Hysterie-Analyse)」 (細木照敏・飯田真訳) フロイト著作集 5, 人文書院.
- フロイト, S. (1978) 『ヒステリー研究』 (懸田克躬訳) フロイト著作集 7, 人文書院.
- 北山修 (1993) 『言葉の橋渡し機能 — およびその壁』, 岩崎学術出版社.
- Kanzer, M. & Glenn, J. (Ed.) (1995) *FREUD AND HIS PATIENTS*. Jason Aronson (1980). Kanzer, M. ら編『フロイト症例の再検討 I・ドラとハンスの症例』 (馬場謙一監訳), 金剛出版.
- Glenn, J. (1980) Freud's Adolescent Patients: Katharina, Dora and the "Homosexual". In: Kanzer, M. & Glenn, J. (Ed.), *FREUD AND HIS PATIENTS*.
- G. Kohon (1992) ドラに関する考察: ヒステリーの症例 (川谷大治訳), G. Kohon 編『英国独立学派の精神分析』 (西園昌久監訳), 岩崎学術出版社.
- Langs, R. J. (1980) The Misalliance Dimension in the Case of Dora. In: Kanzer, M. & Glenn, J. (Ed.), *FREUD AND HIS PATIENTS*.
- マホーニイ, P. (1996) 『フロイトの書き方』 (北山修監訳), 誠信書房.
- Mahony, P. (1996) *FREUD'S DORA*, Yale Univ. P.
- マホーニイ, P. (1997) ああ! 可哀なドラ: みんな彼女の病気を知っていたのに (鈴木ありさ・埴美由貴訳), 精神分析研究, Vol. 41, No. 2, pp. 85-100.
- 小此木啓吾 (1997) マホーニー論文をドラ研究にどう位置づけるか, 精神分析研究, Vol. 41, No. 2, pp. 106-108.

下坂幸三（1970）症例ドラ，精神分析研究，
Vol.16, No.1, pp.1-4.

豊永武盛（1999）「声と身体」の語らい，九州大
学北山研究室定例研における発表（1999年
7月13日，北山研究室にて）